修士論文(要旨)
2020 年 1 月

動詞スルとその目的語
―構文と連体修飾に着目して―

指導　青山　文啓　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
218J3003

郭　凌軒

Master's Thesis(abstract)
January 2020

Suru-verb and its Objective Nominals: with a Special Reference to Constructions and Adnominals

LINGXUAN GUO
218J3003
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Fumihiro Aoyama

目次

第 1 章　序論
　1.1　研究背景と目的
　1.2　先行研究
　1.3　研究方法:データベースと検索方法
第 2 章　連体修飾を必須とする目的語について
　2.1　固有属性を表わす目的語
　2.2　非固有属性を表わす目的語
　2.3　連体修飾による違い―固有属性か非固有属性か
第 3 章　連体修飾を必須としない目的語について
　3.1　動詞性と名詞性
　3.2　動作名詞である目的語
　3.3　無動作名詞である目的語
　3.4　役職名詞である目的語
第 4 章　まとめ
　4.1　まとめ
　4.2　おわりに
参考文献

金田一(1950)は、日本語の動詞を(a)状態動詞、(b)継続動詞、(c)**瞬間動詞**、(d)**第四種動詞**の四つの種類に分けている。しかし、動詞「する」はどちらかの種類に属するとは言えず、場合によって用法が変わる。青山(2000)は、「スルのように使用頻度の高い用言ほど、最も深い階層にある連用修飾(目的語)を参照してはじめて用法が判明する」と指摘している。動詞「する」の用法はそれ自身で決まるわけではなく、目的語とその修飾語に影響される。

本稿では動詞「する」の目的語を考察の対象とし、目的語の性質とその修飾語が構文に与える影響に着目する。本稿の研究目的は、動詞「する」の用法を目的語を細分化することにより明らかにすることである。

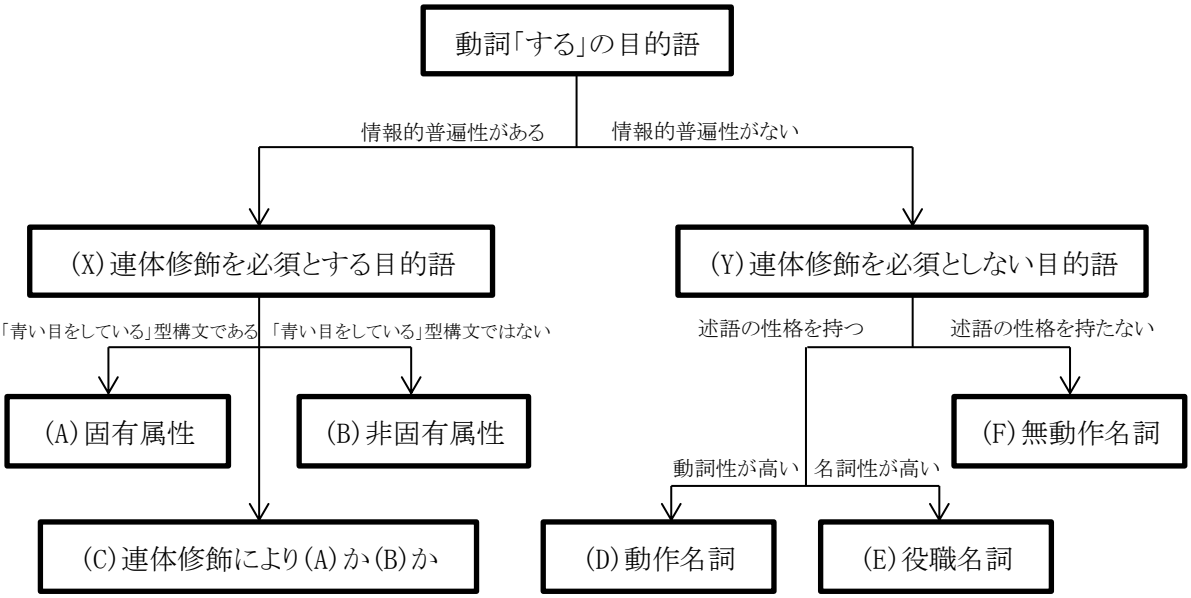
本稿では『新潮文庫 100 冊』を主な対象として、「する」およびその活用形を含む例文を検索して分析を行なった。そのほか、参考文献リストで挙げられている文献から「する」の例文を拾い上げて分析対象とした。

まず、本稿では言語情報において、対象者にとって、あるものの存在の有無を問題にしないことを、「情報的普遍性」があると定義した(例:「動物」の「身体」)。そして情報的普遍性の有無を基準にし、動詞「する」の目的語を「(X)連体修飾を必須とする目的語」(例:「言い方」)と「(Y)連体修飾を必須としない目的語」(例:「勉強」)の二つのグループに分けた。

次に、文の中の「している」が「する」に置き換えられるかを基準にし、(X)グループに属する目的語をさらに細分化した。目的語が対象者の意志で変えられない属性(例:「人間」の「身体」)を表わす名詞の場合、「青い目をしている」型構文に分類される。この場合、意志を表わす「する」の形は使えず、状態を表わす「している」の形しか使えない。それに対して、目的語が対象者の意志で変えられる属性(例:「人間」の「格好」)を表わす名詞の場合、状態を表わす「している」の形と意志を表わす「する」の形は両方とも使える。一方、(X)グループの中には連体修飾の違いによって性質が変わる目的語(例:「荒っぽい/退屈そうな」「顔」)も存在する。こうして、(X)グループに属する目的語を〈(A)固有属性〉〈(B)非固有属性〉〈(C)連体修飾によって(A)か(B)に分かれる名詞〉という三種類に分けた。

次に、動作の意味を含むか、述語としての性格があるかを基準にし、(Y)グループに属する目的語を細分化した。目的語が何らかの動作を表わし、意味的に動詞相当である名詞(例:「勉強」)もしくは職業や役割などを表わす名詞(例:「教師」)の場合、動詞「する」が実質的な意味を持たない形式述語であり、助動詞の性格に類似している。その場合、動詞「する」より目的語こそが述語としての役割を果たすといってもよい。それに対して、目的語が動作の意味を含まず、職業や役割を表わさない名詞の場合、目的語を文の述語として扱うことができず、動詞「する」は実質的な意味がある実質述語であり、「している」の形は〈結果〉を表わす。こうして、(Y)グループに属する目的語を〈(D)動作名詞〉〈(E)役職名詞〉〈(F)無動作名詞〉の三つのグループに分けた。

以上が本稿の要約である。分類手順を樹形図としてまとめれば以下のとおりである。



(A)から(F)までは同じレベルでの分類であるが、スペースの関係で、同じ高さに並べることができなかった。

グループ(A)から(F)それぞれの代表例を以下に挙げておく：

(X)連体修飾を必須とする目的語

(A)固有属性

例：彼女はとてもすべすべとした綺麗な身体をしている。

(B)非固有属性

例：彼女は銀行員みたいに地味な格好を「している/する」。

(C)連体修飾によって(A)か(B)かが判明する名詞

例：四人とも日やけした荒っぽい顔をしていた。（固有属性）

二人ともなんとなく退屈そうな顔を「していた/した」。（非固有属性）

(Y)連体修飾を必須としない目的語

(D)動作名詞

例：僕の影は荷車の修理を「している/する」。

(E)役職名詞

例：息子が小学校の教師を「している/する」。

(F)無動作名詞

例：彼女は水玉のスカーフを「している/する」。

参考文献

青山文啓（1998）「二重主語構文と辞書」 『言語』 27(3). pp. 57-63.

青山文啓（2000）「統語論―単語の二重分節を中心にして」 『一橋論叢』 124(4), pp. 506-515.

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』 くろしお出版

影山太郎（1990）「日本語と英語の語彙の対照」 『講座日本語と日本語教育 7:日本語の語彙・意味(下)』 明治書院

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」 『日本語動詞のアスペクト』 麦書房 1976, pp. 5-26.

佐藤琢三（2003）「「青い目をしている」型構文の分析」 『日本語文法』 3(1), pp. 19-34.

澤田浩子（2003）「属性の階層性とテイル構文―事象叙述から属性叙述へ―」『日本言語学会 第122回大会予稿集』

西山佑司（1989）「「象は鼻が長い」構文について」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 12(21), pp. 107-133.

林四郎（1997）「日本語象鼻文のねうち」 『第十回 日本語教育連絡会議』 リュブリャーナ大学(スロベニア)

三上章（1960）『象は鼻が長い』 くろしお出版

宮島達夫（2003）「カテゴリー的多義性」 『日本語文法の諸問題』 鈴木泰/角田太作[編] ひつじ書房, pp. 29-52.